

水害に悩まされた神戸

神戸市は度々豪雨に見舞われてきた。昭和 13 年 7 月の阪神大水害は総雨量が 3 日間で 462 mm に達し、死者 616 名、被災家屋 89,715 戸に達した。また、昭和 36 年 6 月の集中豪雨では阪神大水害につぐ規模の被害となり、昭和 42 年 7 月にも熱帯低気圧となった台風 7 号による集中豪雨では総雨量が 371 mm に達し、市内各地で大きな被害が発生した。神戸では水害対策が重要な課題である。生田川に関連して特筆すべき点は、昭和 13 年の阪神大水害で、覆蓋化されていた生田川に六甲山の土砂が大量に流れ込み、川が閉塞。周辺市街地は溢れた水により大きな被害を受けた。このため、生田川を再改修して開渠にしたということが挙げられる。

地域の特徴を反映する下水道

水害に悩まされてきた神戸の街だが、雨水排除の役割も担っている下水道はどのように整備されてきたのだろうか。「神戸市の下水道は一部を除いて分流式を採用してきました」と話を始めたのは工務課の竹内設計係長だ。「神戸では河川と下水道が切り離されており、昔から河川の水質は良かったと思います。神戸は地形の特性から水路や側溝が比較的整備されており、雨水と汚水は別に排除するという考え方がとられてきたのだと思います。また、分流式下水道が取り入れられたのは、山々からの土砂を含んだ大量の雨水が下水管に流れ込むことで、管渠が傷んだり閉塞したりすることを避ける目的もあったとようです」。神戸の地形を色濃く反映した下水道整備の姿が浮かんできた。

川の両面を知る

生田川の二級河川部分を管理している兵庫県神戸県民局神戸土木事務所を訪ねた。河川課の古川課長は「新神戸駅より上流は布引の滝や山々の自然を活かした水辺空間を、新神戸駅より下流は県民の方々が水に親しめる都市のオープンスペースとして、また、緊急時の防火用水を確保するための場として整備しています」と答える。しかし、表六甲を流れる川は時に牙をむくことがある。「平成 20 年には灘区を流れる都賀（とが）川で痛ましい事故が起きました。河川敷にいた 16 人が激流に飲まれ 5 人が亡くなったのです」。普段、穏やかな河川が時として恐ろしい姿を見せることがあると語ったのは、河川課の植野主任。「その後、ラジオの電波を利用した緊急警報装置を都賀川はじめ、生田川などにも設置し、回転灯が回ったら直ちに河川から避難してくださいと呼びかけています」。日常の穏やかな流れに見慣れていると忘れがちな自然の大きな力。水害は決して昔話ではない。

生田川を歩く

生田川に沿って歩いて見た。まず、新神戸駅から布引の滝へ。涼しい風が吹く溪谷。緑の中に白い滝が光っている。このあたりの水はかつて赤道を越えても腐らない水“神戸ウォーター”として船乗りたちから好まれたという。さらに登ると展望広場があり、新神戸駅から先の生田川の流れが海へ一直線に向かっている姿が見える。今度は生田川と共に海を目指す。新神戸駅から下流の川筋には公園として整備されている所もあり、子供たちの歓声が聞こえたりする。ひっきりなしに車が行きかう国道 2 号、阪神高速を過ぎると河口は港の中。山中の生田川と、街中の生田川。新神戸駅付近を境にがらりと姿を変える。表情豊かな都市河川だった。



写真左より、布引の滝、新神戸駅付近を流れる生田川、河口の様子